



第10回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

見えること見えないこと

愛媛県・愛媛県立新居浜南高等学校 2年 加地 由華

私は、中学を卒業したと同時に、携帯電話を買ってもらった。その時の私は、そこまで使うことはないだろうが、これから先持っていたら何かと便利だろうと思っていた。そんな私が今考えているのは、携帯の使用料のことだ。

普段、買い物に行った時、私はその代金を現金で払う。親からもらったお小遣いで、毎月やりくりをして、自分の欲しい物を買っている。財布と相談をし、買えないと思えば諦める。それが普通だと思うし、今でもそれは当たり前なことだと考えている。しかし、携帯電話の場合でもし自分の好きなアーティストの曲が欲しくなるとしよう。私はその曲を買ったとする。そうすると私の携帯でその曲はいつでも聴くことができるようになる。先に挙げたことと、携帯電話のこと、この2つは、どちらも形としてあるかないかという違いはあるものの、同じ買うという行為を行っている。どちらもお金がかかっているのだ。先の方は私のお小遣いで、物を買う時にお金を払った。携帯電話の方はというと、その場では払っていないものの、その月の携帯使用料を払う時、同時に払われている。どちらも当たり前なことなのだが、私が注目したいのは、私の目の前で、現金（お金）のやり取りが行われたかどうかということだ。先の方では私が物を買って、きっと店員とやり取りをしたのだろう。コンビニでもスーパーでも何でもいい（自動販売機の場合は店員はいないが、お金のやり取りがあったのは確かなのでよしとする）。とにかく形ある物を買ったのだ。一方、携帯電話はどうだろう。曲を買ってはいるのだが、私の目の前でお金のやり取りは行われてはいない。そして私の場合父が使用料等を払っているためお金のやり取りを見ていない。まあ、高校生が携帯の使用料を自分で払うのは、バイトをしている人か小遣いから出すかなどといったところだと考えておく。生憎だが私はバイトはできない。校則では無断ではできないそうだし、もともとやる気もないのだが。とまあ、あくまで私は見てはいないのだ。





そんな私はある時父から、
「先月ちょっと携帯使い過ぎだったぞ」
と言われた。私はそんなに使っているつもりはなかったが、使用料がそれだけかかっているのがその証拠なのだろう。その時は素直に謝った。しかしその後もあまり使用料は減らない。父も半分諦めたようで、もう何も言わなくなった。そんなある時、登録しているサイトを見たりしていると、欲しい画像があるのだが、ポイントが足りないのだ。ここで、私は、足りないポイントは、買おうということで買ったのだ。何気ない、自分の欲しい画像を買うための行動。ぼんやりとポイント購入の画面を見ている時、そういえば、最近携帯でいろいろ買ってるなと思った。というより今思えば、もっと早くに気付くべきなのだが、その当時は、携帯の便利さ（いつでも好きな曲を聴けたり、読みたい漫画を読んだりできる）にだけ目がいき、自分の料金についてなど考えられずにいた。そんな状態で、やっと使用料が高かったのがわかったのだった。わかったところで、このまま終われば、きっと来月の使用料にも大した変化は表れないだろう。なので登録しているサイトや、その月に買った曲や画像を書き出してみた。書き出してわかったことは無駄が多すぎることだ。例えば、CDを持っていてその曲が入っているのに、わざわざ携帯でも取り込んでいるだとか、本棚にある漫画を携帯で読んでいるなど、とても無駄すぎるものだった。曲はいつでも聴きたいから、という理由だった気がする。自分のことながら呆^{あき}れてしまう。まあ無駄がわかったので、あとはそれを減らしていだけなのだが、今までの感覚が抜けなくてついついということがあった。今では我慢して、自分に無駄なのだといい聞かせている。

今こうして思うことは、お金が見えるか見えないか、この差はとてつもなく大きいということだ。自分でお金を持って物を買う時は、お金の大切さをわかっている。自分でやりくりして、いろいろ考えて我慢や諦めたりすることは、お金のありがたみをわかっているのだと思う。しかし、携帯電話の方では、目に見えず自分のお金ではない。自分のお金だとしても、少しだからと思いいろいろ買ってしまうのだ。お金は自分の手元に無限にあるわけではない。そのことを深く理解しなければならないと思う。最近ではクレジットカードや電子マネーなどが普及し、便利に物やサービスを買ったり利用することができるように





なっている。でも、これらは、物を買った時、自分は現金に触れないから、ついつい無駄な物を買ってしまったり、買い過ぎてしまい、予想外の請求が来たなどということが人によってはあるのではないだろうか。でもその時に気付いたのでは遅いのもかもしれない。クレジットカード等の便利さは、とても役立っているが、だからこそ、お金を手に取り、自分のお財布事情と対話してみるのもいいのではないかと思う。

小学生の頃、遠足で、おやつは300円までというルールがあった。300円という決められた金額(ルール)の中で、悩み抜いておやつを買っていた。今思えば、その頃が一番お金と向き合うことができていた時なのかもしれない。決められた枠の中で、純粋にお金と向き合っていたあの気持ちを忘れてたくはない。

今、物やサービスが、生活の中にたくさん溢れ、とても満足のいく世の中だと思う。でもこんな世の中だからこそ、お金への感謝の気持ちを忘れてたくはない。

当たり前という言葉があるが、その反対の言葉はありがとうや感謝だと思う。人に何かをしてもらうのは当たり前ではない。だから自分の手元にお金があるのは当たり前ではないのだ。お金が私の手元に来ているのは父が必死に働いているからだ。コンビニで物を買うと、ありがとうございましたと言われるのは、物を買ってもらうことが当たり前ではないからだ。お金には、見えるのだけど見えないものが溢れている。今の私はそれを理解したうえでお金と向き合っていきたい。それは簡単なことのように、案外難しいことだと思う。だから私は、いつになってもあの頃の純粋な気持ちを忘れてたくない。

